

# 大学入学共通テストについて

## ——日本史

吉野 領剛

これまでのセンター試験が、すでに「知識問題とともに思考・判断を重視した設問をバランスよく出題していた」という認識を、ほとんどの日本史教員がもっているのではないだろうか。一方、2017・18年に実施された試行調査問題はあまりにも力作で、これだけ史・資料をふんだんに使った作問をいつまで続けられるだろうか、と私は心配したものである。

予想通り、2021年1月16日(第1日程)に実施された大学入学共通テストの日本史Bの形式は従前のセンター試験の出題に近かったが、思考力や判断力を問う姿勢はいっそう鮮明になっていた。大問数はセンター試験と同じ6題だが、マーク数は4個減少の32個。それでも時間が足りなかった受験生が多かったようで、設問文の読解力や情報処理速度の重要性がうかがえた。

本稿の主目的は、共通テストの問題分析ではない。高校生の学習の過程や発表など、教員からの一方的な知識伝達ではない授業風景が設問文に描き出されたように、共通テストは我々教員にも変革を求めている。限られた紙幅のなかではあるが、共通テストの設問を受けて、学校現場でどのような取り組みができるか考えてみたい。

### 史・資料の活用と授業のあり方

一昔前に比べて教科書がカラフルになり、また各社が工夫を凝らして資料集を製作するなか、現在の日本史の授業における史・資料の活用はすっかり定着しているといえよう。

本テストではグラフの読み取り問題が2題出題されたが、4『小判の重量と金の成分比率』、31『経営規模別農家戸数と兼業農家の戸数の割合』はともに教科書『詳説日本史 改訂版』(日B309)掲載資料の見た目を変えたものである。また、13『紀伊国那賀郡神野真国莊絵図』は初見資料であろうが、『詳説日本史』p.80に掲載の「神護寺領紀伊国杵田莊絵図」で莊園村落について学習していれば、聞かれている内容は既習事項である。つまり、教科書を使った基本的な知識を身につけさせる授業が、共通テストの対策といえる。

しかし、史・資料を使った授業を実践していても、結論を「教員が説明」してしま

っていないだろうか。史・資料を提示して「生徒に考えさせ、(話し合わせ、)説明させる」、あるいは史・資料を使った「問題演習に取り組ませる」といったプロセスを通さないと、テスト本番で、見慣れない史・資料を前にひるんでしまう。結論を急がない姿勢で、授業を組み立てたいものだ。

史・資料の読み取りに目が行きがちだが、を解くには大名の種別や井伊直弼の藩名・事績についての知識が必要である。また、は中国諸王朝の領域が示された地図を年代順に配列させる設問だったが(本校受験生の正答率がもっとも低かった設問)、こうした新しい形式をふまえ、世界史的な観点・知識も身につさせねばならない。

思考力・判断力を育む機会をつくり、かつ知識・理解の集積をはかる。そのようなことが限られた授業内でできるのか。そのヒントが、本テストで提示された「テーマ発表」「博物館学習」「図書館の活用」である。授業はあくまで彼らが「学びに向かう」ための時間であり、日本史への興味・関心を高められれば、彼らの自学によって知識も増え、思考力・判断力も身につくはずである。多分に理想論的であるが、めざす道としては間違っていないだろう。

## 思考力・判断力をはかる作問

高校の日本史の定期考査の多くは、50分程度の時間で、狭い出題範囲のなかでおこなわれる。長い試験時間に少ない「ネタ」という前提条件を考えれば、また、基本的な歴史用語の蓄積の有無の確認も必要であるから、いわゆる「虫食いリード文の穴埋め問題」が多くなるのはいたしかたないのかもしれない。しかし、それが生徒から「日本史は暗記モノ」とみられてしまう一大要因になっている。狭い出題範囲のなかにあっても、1題でも2題でも「思考力・判断力」を問えないか。の設問から考えてみよう。

「X 国家は、自ら鑄造した錢貨しか流通を認めなかった」と関連する法令として、「a 運脚らは錢貨を持参して、道中の食料を購入しなさい」「b 私に錢貨を鑄造する人は死刑とする」のどちらかを選ぶ。a・bともに『詳説日本史』に直接的な記載はないので悩むところだが、設問内の「咲也さんのメモ」を読んで、京・畿内の外では物々交換がおこなわれていたという『詳説日本史』p.47の内容を想起すれば、「道中で食料を購入できないだろう」ことに気がつくことができる。すなわち、aが誤答だ。上記メモにある「古代には、米や布・絹なども貨幣として通用している」を読み飛ばさない読解力、またそれをヒントとして受け止められる知識・理解があって、はじめて思考・判断の段階となる。

このような丸暗記だけでは対応できない選択肢を含んだ問題を、多忙な高校教員が「開発」することは難しい。それでも、多くの大学入試問題に触れることは、そうした良問を「発見」する機会となるだろう。私自身は過去の大学入試問題に加え、「高等学校卒業程度認定試験(旧大学入学資格検定)」から多くの示唆を得て、作問だけでなく、授業時のアイスブレイクにも活用している。文部科学省のサイトに過去問題が掲載されているので、興味のある方はぜひご覧になるとよいだろう。

## おわりに

2021年1月18日付『日本経済新聞』によれば、大学入試センターの担当者は「教科書の知識でそのまま答えられる問題は避けた」と述べたという。つまり、教科書の知識が「別のかたち」で出題されて「思考力・判断力」が試されるとしても、その土台として「教科書の知識」の修得は必要なのである。

「どのように学ぶか」をふまえた場面設定、思考力・判断力を試す多くの作問。今回の共通テストは、実にメッセージ性の強いテストである。授業という限られた時間のなかで「体系的知識の形成」をどのようにはかるか、思春期の彼らがノッてくるような「考える場面」をどのようにつくるか、そんなことを考える大きな契機となった。

この原稿を執筆しているのは1月下旬であるが、新テスト実施直前までの「迷走」、そして新型コロナウイルスの流行という未曾有の危機を乗り越え、これからの私大・国公立2次試験にのぞむ受験生へエールを送りたい。

(よしの・むねたか／東京都立西高等学校教諭)

# 大学入学共通テストについて

## ——世界史

濱野 勇介

**20** 21年1月16日にはじめての大学入学共通テスト世界史Bが実施された。受験生は、対策用の問題集や模擬試験などで準備をしてテストにのぞんだと思う。しかし、2017・18年の試行調査では、従来のセンター試験にはない出題形式の問題が提示されたことから、テスト当日に向けての不安は少なくなかったと思われる。従来にはない出題形式について大学入試センターは、共通テスト作成の基本的な考え方として、「高等学校教育を通じて大学教育の入口段階までにどのような力を身に付けている」<sup>①</sup>かをはかるために、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」<sup>②</sup>と発表した。また、歴史科目については、「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」<sup>③</sup>し、「歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める」<sup>④</sup>ことを明確にした。本稿ではこれらの点をふまえて、今回の出題傾向やそこからみえる共通テスト対策に必要な指導の視点について述べていきたい。

① 大学入試センター「令和3年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」(2019年6月) p.1。

② 同上p.1。

③ 同上、別添「出題教科・科目の問題作成の方針」p.1。

④ 同上、別添p.1。

### 2021年度大学入学共通テスト世界史Bの全体的な傾向

ここでは、出題された時代や地域についてではなく、問題全体を通しての出題傾向について述べてい。大きな特徴として、試行調査をふまえたうえで、従来のセンター試験よりも資料を活用した問題が大幅に増加したことがあげられる。センター試験の時と比べて、第1日程では小問の数が2問(第2日程では3問)減少したものの、文献・絵画・写真・地図・表・グラフなどの資料や会話文が数多く用いられ、組み合わせ問題も多く出題されたことから、問題の分量は増加したといえる。資料を正確に読み取り、学習した知識と結びつけて解答する思考力を必要とする問題となったため、単純な暗記だけでは解くことができず、解答を導くための時間も増えた。一方、試行調査と異なった点は、複数の正解がある問題や、いわゆる連動式の問題が1つもなかった点である。全体として、センター試験から出題傾向がかわったことから、戸惑いを感じた受験生は少なくなかったのではないだろうか。

## 大学入学共通テスト世界史Bに向けての指導の視点

⑤大学入試センター「平成30年度試行調査(プレテスト)の問題作成における主な工夫・改善等について」、別添資料「【歴史】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ(素案)」(2018年11月)。

大学入試センターは、問題作成の方針として「作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ」⑤を提示し、歴史科目については次の9つの力が示された。

- ・資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推することができる
- ・考察したことや構想した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめることができる
- ・歴史的事象を時系列的にとらえることができる(時系列)
- ・資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察することができる(推移や変化)
- ・複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえることができる(諸事象の比較)
- ・諸地域世界の接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを明らかにすることができる(事象相互のつながり)
- ・背景、原因、結果、影響に着目して歴史の諸事象相互の関連を明らかにすることができる(事象相互のつながり)
- ・歴史的事象の多面的・多角的な考察を通して、日本や世界の歴史の展開や歴史的な意味や意義をとらえることができる
- ・習得した歴史的概念を活用し、現代的課題に応用することができる

これらの観点は、今回の共通テストだけではなく、次年度以降の問題作成の際にも重視される可能性がある。この点もふまえて、今後の授業等で指導する際の視点について述べたい。

初めに、出題形式に関わりなく必要と考えられる指導の視点についてである。従来のセンター試験よりも読み取る文章や資料などの分量が多くなり、その内容が正答に結びつくことから、正確に読み取ることが必要になった。生徒に対しては、設問文だけではなく、資料の説明文にも目を通し、資料を正確に読み取るように指導することが考えられる。そのうえで、学習してきた歴史的事象の知識と組み合わせで正答を導かせることが基本となる。

つぎに、出題形式ごとに必要と考えられる指導の視点を5つあげたい。①時系列的にとらえる問題に対しては、歴史的事象の年代を理解させるとともに、各地域における国家・王朝などの変遷について年代順に整理させる視点／②推移や変化についての問題に対しては、表やグラフにおけるデータの推移や歴史的事象の時間的な流れおよび地域間の交流を重視する視点／③共通点や差異をとらえる問題に対しては、複数の資料から歴史の諸事象を比較し、その共通点や相違点をみつけ出す視点／④事象相互のつながりについての問題に対しては、歴史的事象がおこった原因・その事象が与えた影響・その後の変化について考えさせる視点／⑤歴史的事象を多面的・多角的に考察する問題に対しては、今回の出題でも数多く用いられた文献資料などを活用して、複数の歴史的事象を比較したり関連づけたりしながら

ら考察させる視点、の5つである。5点目の多面的・多角的に考察する問題の例をあげたい。第1日程の第1問の間4は、歴史家マルク＝ブロックが著した『歴史のための弁明——歴史家の仕事』の一節を正確に読み取り、ブロックが研究者に助言する際に前提としたと思われる歴史上のできごとを把握するとともに、文書資料についてのブロックの説明として正しいものを受験生に考察させる問題であった。また、第1日程の第3問の間8は、遼(契丹)から宋への亡命者の手紙の一節を正確に読み取り、手紙を改ざんした意図について受験生に考察させる問題であった。

以上の5点に加えて、今回の共通テストでは、会話文を用いた出題形式が第1日程では4カ所(第2日程では7カ所)みられた。先生と生徒との会話だけではなく、生徒同士や観光ガイドとの会話など様々であった。従来のセンター試験ではあまりみられなかった出題形式にも慣れるように指導する視点も必要である。私は授業において、これらの視点を意識して指導していくのがよいのではないかと考えている。

今回の出題では多くはみられなかったが、日本と世界との関わりという視点も大切である。この点については、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』の世界史探究の目標にも、「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解する」<sup>⑥</sup>と示されていることから、今後に必要な視点でありつづけると考えられる。

⑥ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』(東洋館出版社、2019年3月) p.273。

## まとめ

今回の出題傾向や出題形式ごとの指導の視点から共通していえることは、2つある。1つは、問題に書かれている情報を正確に読み取ること。もう1つは、歴史的事象を正確に理解しておくことである。これらは、従来のセンター試験に向けての対策と同様であるが、思考力・判断力・表現力を発揮して解くことが求められる問題が重視されたことにより、その重要性が増したと考えられる。では、受験生が歴史的事象を正確に理解するためにもっとも有効なテキストが何かといえば、日頃から学習で使っている教科書にほかならない。教科書の用語だけではなく、文章の内容を正確に理解する習慣をつけることが最善と考えられる。そして、教科書にはない文献・絵画・写真・地図・表・グラフについては、図説などの副教材でおぎなうのがよいのではないだろうか。私自身もこの視点を基本に今後とも指導をしていきたいと考えている。

(はまの・ゆうすけ/東京都立竹早高等学校主任教諭)